

令和3年度 障がい者通所施設かがやき

事業報告書

1. 令和3年度 事業実績

登録利用者数	24名
年間延べ利用者数	4972人
1日平均利用者数	19.6人
開所日数	253日

※性別内訳

男性	女性
13名	11名

※支援区分内訳

区分1・2	区分3	区分4	区分5	区分6	計
				24	24

※年齢別内訳

18～19歳	20～29歳	30～39歳	40～49歳	50～59歳	計
3	12	8	1		24

2. 令和3年度 事業の総括事項

(1) 安心・安全なサービスの提供

①新型コロナウイルス感染症への対応措置の徹底

・今年度も新型コロナウイルス感染症への対策を国・県・市の指導に基づき行なった。利用者、職員ともに感染することなく1年を過ごすことができた。しかし、家族が感染されたことで濃厚接触者となられた方は一定期間自宅待機された。当施設利用者は病弱な方も多く、ご家族も感染については慎重になられていることもあり、都度の情報提供は迅速に行うことに心掛けた。

また、長引くコロナ感染対策での活動制限により息苦しさを感じて、情緒不安定になれる利用者もおられたが、できるだけ安心して安全に通所していただけるように心掛けた。

②重症心身障がい者に特化した生活介護の実施

・支援の基本目標を「心地よい居場所の提供」、「健やかな生活への見守り」、「その人らしさの発揮」、「他者とのつながり」とし、ご本人の成長や発達の視点を軸に取り組んできた。

・生活介護事業の実施に際しては、サービス管理責任者を中心に、個別支援計画及びリハ

ビリテーション計画を策定し、それに基づく支援を展開した。

③利用の状況

- ・利用登録者数は、特別支援学校高等部を卒業された4名が利用開始され26名の利用者となった。12月に男性利用者1名が守山市の施設に入所されることになり退所、また同月に女性利用者1名が野洲市の施設に入所されることになり退所された。年度末時点で登録者数は24名となった。
- ・開所日数は253日で、延べ利用者数は4972名、1日平均利用者数は19.6名であった。女性利用者1名がレスパイト中に骨折され50日間入院された。男性利用者1名が肺膿瘍のため25日間入院された。また、新型コロナウイルス感染症の拡大のために利用を自粛される利用者もおられた。

④送迎の実施

- ・送迎については今年度も車両11台による送迎体制を組み、毎日の朝夕の送迎を実施した（送迎対象者22名、家族送迎2名）。
- ・新型コロナウイルス感染症対策で乗車前の検温、走行中の換気、マスクの着用、使用後の消毒など感染予防に努めた。

⑤家族との連絡連携

- ・日々の活動や体調の様子については、毎日の連絡ノートへの記載や送迎時に保護者の方に直接報告を行うとともに、11月に個別に保護者懇談会をし、個別支援計画及びリハビリテーション計画の評価内容を確認していただき保護者の方からのご意見や要望をお聞きする機会とした。毎年行っている保護者懇談会の全体会は昨年度に引き続き新型コロナウイルス感染症の流行により中止した。

⑥福祉機器の導入

- ・ノーリフト介護を導入し、天井走行リフト等の福祉機器を使用することで職員の腰痛の軽減と利用者の危険や苦痛の軽減につながった。全職員が安全に使用できるよう繰り返し使用方法の講習を行い、すべての職員が安全に留意するように徹底した。

⑦利用者の健康管理

- ・日々の利用者の健康管理と異常の早期発見に努めた。毎日のバイタル測定や月1回の体重測定を行い結果を保護者へ伝えることで、家庭での体調管理にも活かしてもらうことができた。
- ・それぞれの利用者の主治医に指示書をもらうことで、てんかん発作時に適切な対応ができたり、医療ケアの必要な利用者に対しても指示書に基づきケアすることができた。
- ・今年度も引き続き、国立病院機構紫香楽病院の医師に月1回来所していただき、利用者の心身の状況や障害特性およびアプローチにかかる専門的な手法等についての指示・助言を受け、より専門的な支援ができるよう学ぶ機会とした。また、保護者からの相談や利用者の状態を直接診てもらい助言をいただいた。
- ・年齢を重ねるにつれて、体調やてんかん発作にも変化が出てきている利用者もおられ、発作時の観察項目などを一覧表にして記入し、通院時に主治医にわかりやすく伝わる工夫をした。

- ・医療ケアの必要な利用者が年々増えていくので、職員に対する勉強会を行なう機会が増えた。人工呼吸器の説明に業者に来ていただき講習会を開いたり、また職員研修のなかでも利用者の病気の理解を深められた。

利用者をスムーズに受け入れられるように在学中に実習だけでなく学校訪問を行ない、日中の利用者の様子を知ることができた。また、必要物品を事前に準備することもできた。

(2) 療育活動の積極的な展開

①療育活動への取り組み

- ・本年度も様々な活動プログラムを準備し、多彩な療育活動に取り組んだ。また、ユニット制を取り入れたことで少人数での活動も可能になり、利用者それぞれに適した活動を実施することができた。活動の「ねらい」「目的」を全職員で周知し、観察、評価につながった。
- ・療育活動においては、活動の基本となる個別の機能訓練に重点を置き、ご家族からの聞き取りや要望を踏まえて、2名の理学療法士と連携を図りながら毎日取り組むことができた。感覚遊び、音楽活動、創作活動、エアトランポリン等の活動をこれまでの経験に基づきながら工夫して実施した。
- ・今年度も新型コロナウイルス感染症の影響で「密」を避けての活動になったが、一定の制限を設けての活動にも慣れ、様々な工夫ができるようにもなった。しかし、利用者の中にはコロナ禍でのストレスで情緒不安定になられる方もおられた。一人ひとりの利用者の変化を感じ取り、支援することに努めた。

②合同音楽活動について

- ・びわこ学園医療福祉センター野洲通園（さんさん）との合同活動を開始して7年が経過した。月2回の活動があり、かがやきからは2名の利用者が参加している。びわこ学園の音楽療法士1名とかがやきからは洛和会京都音楽療法研究センターの音楽療法士と契約し1名派遣してもらい2名の音楽療法士での対応となっている。

しかし、今年度は4月の時点でコロナ感染症の影響により、洛和会京都音楽療法研究センターより音楽療法士の派遣が難しいとの理由と他施設との交流は避けた方が良いとの判断で活動中止となった。

③快適な入浴

- ・今年度より希望される利用者への入浴を週2回にした。21名の利用者が希望され入浴していただいた。適切に福祉用具を使用し、安心して快適な入浴を提供することができた。

④食事サービス

- ・ミールサービス谷口（長浜市）より保温容器での配達。汁物と米飯は施設内で調理師による調理での食事を提供している。長浜市からの配達ということで12月の積雪により配達ができない日が2日間あった。1日目は配達が遅れる連絡が12時を過ぎていたこともありレトルト食品等での対応となった。2日目は近隣で弁当を注文し調理員により

各食事形態に調整し対応した。

- ・施設内のキッチンでの調理師による調理は、日々に工夫し多様なメニュー、また暖かい汁物と米飯を提供することができた。
- ・食事介助については、利用者一人ひとりの個性や食事ペースに配慮し、個別対応での食事としている。一人ひとりの状態をしっかり把握でき、利用者も安心して食事することができた。

⑤年間行事

- ・季節感を感じられ、利用者が楽しめる行事を計画、実施した。

- 4月22日 新規利用者歓迎会（1班）
- 26日 新規利用者歓迎会（2班）
- 7月28日 お楽しみ体験会(甲賀福祉セラピストの会によるハンドマッサージ等)
- 8月26日 夏祭り(2班)
- 31日 夏祭り(1班)
- 10月26日 ハロウィンパーティ(1班)
- 28日 ハロウィンパーティ(2班)
- 11月15日 秋祭り(焼き芋パーティ)(1班)
- 12月20日 クリスマス会(2班)
- 12月22日 クリスマス会(1班)
- 1月20日 新年会(1班)
- 21日 成人を祝う会
2名の利用者の成人のお祝いを行なった。
- 2月 1日 節分豆まき(1班)
- 3日 節分豆まき(2班)
- 3か月毎 誕生日お祝い食事会

(4) 会議および研修の計画的な実施

①会議およびミーティングの実施

- ・職員会議を定期的実施し、職員相互の研鑽、新たな取り組みへの立案、課題解決への協議などについて職員相互の意見を交わす機会とした。また、日々のミーティングを充実させるため、職員朝礼(10:00)とミーティング(17:00)を実施した。日々の打ち合わせと今取り組むべき課題について話し合い、職員相互のチームワークを固める機会とした。

②職員研修

- ・施設内研修

今年度は施設内研修に多くの職員が参加できるように6月と10月に午前中のみ開所の日を設け、午後に研修の機会を設けた。

- 5月27日 「食べる事とは」～覚言語聴覚士による講習
- 6月30日 「AEDの使用方法と救急救命について」～セコムによる講習
- 10月27日 「重い障害のある人たちの日中活動支援について」
- ・施設外研修
- 12月9日、14日 「障害福祉分野における対人支援のための記録入門研修」

(5) 地域交流、地域支援活動

①ボランティア活動の受け入れ

施設見学の受け入れ

- ・新型コロナウイルス感染症流行の影響で当初予定されていた施設見学等はすべて中止となった。

③小中学校への福祉教育活動

- ・新型コロナウイルス感染症流行の影響で予定されていた車いす体験学習が中止となった。

④就業体験実習の受け入れ

- ・三雲養護学校の高等部3年生（4名）、および高等部2年生（1名）の受け入れを行ない、卒業後の進路として検討する機会としていただいた。その後、高等部3年生の4名については支援学校卒業後、当事業所への利用を確認した。

(6) 事故防止対策の充実

今年度はヒヤリハットが11件、事故報告が6件であった。職員ミーティングで確認し、個々の要因分析を行い、再発防止に努めた。また、ヒヤリハット報告を多く出すことで大きな事故を防止できる効果が考えられるので今後も継続していきたい。

①ヒヤリハット（11件）

- ・リフト車で送迎時に車いすの固定はしていたが、カーブで車いすが横転しそうになった。添乗していた職員が対応し大事には至らなかったが、その後は車の手すりとなりの車いすを補助的にベルトで固定することにした。
- ・シリコン製のスプーンを使用されていて、介助中にかけていることに気付いた。
- ・利用者が休憩時にマット上で急に不穏状態になられ暴れられた。職員2名で対応するが床とマットの境目で頭を打ってしまわれた。
- ・注入時の漏れ（3回）
- ・送迎時に母親と玄関までの介助を行なった際に母親との話し中に玄関床から落ちそうになられた。
- ・天井走行リフト使用時にスリングシートのフックを1つかけ忘れた。
- ・食事配膳中に利用者の特性を忘れて利用者の傍に配膳してしまい、すべて床に落としてしまった。
- ・注入ポンプが上手く作動せず、何度かやり直している間、クレンメを閉めていなかったため注入物が流れてしまっていた。

②事故報告（6件）

- ・食事中に食物を喉に詰まらせた。吸引等に処置により大事には至らなかった。
- ・支え歩行中に転倒された。怪我等はなし。
- ・ストレッチ中に四つ這い姿勢の時にバランスを崩されて顔をマットと床の境目で打たれた。下顎に熱感と腫脹、頬に本人の爪に当たった傷ができた。
- ・トイレのオムツ交換台からの転落。ゆっくりではあったが頭からの転落だったため、念のため受診する。特に異常はなかったが、経過観察の指示が出た。その後も特に異状は見られなかった。
- ・風邪薬と頓服薬（解熱剤）を持参されていたのだが、確認不足で両方を内服してもらい誤薬となった。
- ・昼食時の内服薬が変更になり減らされている旨が連絡帳に記されていたが、連絡帳をしっかりと確認しておらず持参忘れだと思い込み、非常時用の薬を内服してもらった。

3. 次年度に向けた課題

- ・今年度末に看護師4名、主任生活支援員1名が退職するという事態になってしまった。看護師の確保に努めることはもちろんだが、利用者の安全を一番に考えて日々の支援体制、送迎体制を検討していく必要がある。ご家族への説明と協力の依頼、都度の状況説明など、ご家族との信頼関係の回復に努める。
- ・看護師と生活支援員の業務分担、またそれぞれの職種の業務を理解し、協力、連携してより良い支援に繋げていけるようにしていきたい。
- ・療育活動の内容については、一人ひとりの可能性や興味の拡大、取り組みへの楽しみなどが発見できるように、主任を中心に活動プログラムをさらに工夫していく必要がある。また一緒に活動する仲間の存在についても意識し、相互に関係性を築いていける取り組みを見つけていきたい。そのためにも専門的な視点で実践に当たる力を職員全体が身に着けていく必要がある。
- ・健康面で配慮が必要な利用者が増えてきており、保護者や主治医との連携を看護師が中心となって実施しているが、来年度はさらに医療ケアが必要な利用者4名の入所が予定されている。医療ケアを行なう看護師、生活支援員の重症心身障がいへの専門知識の習得とスキルの獲得が一層に求められてくる。
- ・今後も年々利用者が増加していくことで送迎車両や送迎体制の確保が課題となってくる。その中でもより安全な送迎実施について最大限に注意を払うことが求められる。定期的な安全運転への確認の機会を設けていきたい。
- ・各利用者の家庭状況も様々で、生活介護サービスの提供のみならず、家庭事情に応じた支援についても、他サービス担当者との連携を図り、可能な範囲で支援を実施していく必要がある。